浜田市議会議長 笹田 卓 様

産業経済委員会委員長 川上 幾雄

委員派遣報告書

本委員会は、下記のとおり委員を派遣し、視察調査を終了したので報告します。

記

- 1 期間 令和6年4月25日(木)・4月26日(金)
- 2 視察先及び調査項目
 - (1) 鳥取県鳥取市 道の駅 西いなば気楽里
 - ・道の駅の経営及び誘客等について (現地視察)
 - (2) 岡山県岡山市 かながわ SAKAGURA
 - ・酒蔵跡活用に至った経緯や現在の利用状況について (現地視察)
- 3 精算額 一人当たり 36,260円
- 4 派遣委員、同行者、事務局(合計8名)

委員 川上 幾雄 田畑 敬二 村木 勝也 大谷 学 小川 稔宏 佐々木豊治 牛尾 昭

事務局職員 庶務係長 大下貴子

5 調査の概要(視察の内容等) 別紙のとおり

産業経済委員会 行政視察報告

(1) 道の駅 西いなば気楽里 ~道の駅の経営及び誘客等について~

- ■日時 令和6年4月25日(木)12:00~14:00
- ■場所 道の駅 西いなば気楽里(きらり) 鳥取県鳥取市鹿野町岡木 280-3 TEL 0857-82-3178

■視察目的(選定理由)

当委員会における所管事務調査(取組課題)である「道の駅の指定管理の在り方について」の参考とするため、鳥取市が設置している県内では17番目の道の駅について調査する。

令和元年 5 月に鳥取西道路が開通することにあわせて道の駅は開業し、5 年が経過している。この間、集客人数は 370 万人、年平均 70 万~75 万の利用者があることから参考になると考えたため。

■視察先の概要 (視察先の取組、事業内容等)

- ▶ 鳥取市は、鳥取県の東北部に位置し人口は約 18 万 7 千人 岡山・姫路からは 100 km、神戸・大阪・京都からは 150 kmの圏域に 位置している。
- ▶ 道の駅は、気高町・青谷町・鹿野町が他の東部や南部の町村と共に 平成16年に鳥取市編入され鳥取市西地域に位置している。

➤ 施設規模

敷地面積 19,062 ㎡ (国際規格のサッカーコート約 2.6 面分) 浜村鹿野温泉 IC 出入り口の主要地方道郡家鹿野気高線沿い。 小型車 119 台、大型車 22 台、二輪車 15 台の駐車場。 道路や地域の情報コーナーや休憩スペースには授乳室や畳コーナー 観光案内所、レストラン、物産コーナー、ファストフード、飲食コーナー、体験加工・地域交流室、農畜産・海産加工室、コンビニ、足湯、イベント・休憩スペースと一通りの施設を有している。

➤ 防災拠点機能

備蓄倉庫や太陽光発電や木質バイオマスボイラーなどエネルギーの 自立供給も目指している。

- ➤ 旧3町の合併から3年後の平成19年に商工会も合併したがワンチームにならない状態であった。転機となったのは山陰道鳥取西道路の建設とのことである。
- ➤ 鳥取西道路視察時の国土交通省道路審議会会長の助言も有り、浜村 鹿野温泉 IC 近くに道の駅を造り 3 町の経済推進だけに留まらず移 住定住に向けた地域づくり拠点、さらに産業振興拠点、防災拠点、

観光振興拠点、道の駅連携という地域におけるまちづくりを目標と する総合的拠点機能を目指した道の駅として、鳥取市が約 18 億円 と投じて設置。

■視察の内容(視察先の取組、事業内容等)

- ➤ 道の駅の指定管理団体である「鳥取いなばまちづくり株式会社」は、 まちなか再生のための事業を推進するまちづくりのけん引役とし ての行政や民間企業だけでは実施が難しい事業にも取り組み、公共 性と企業性を併せ持つ会社とし平成29年4月に設立。
- ➤ 「まちづくり株式会社」は、特産品販売から地域振興事業等まで様々で幅広く継続的に取り組んでいく仕組みを創り、まちが発展向上するための必要な組織と位置づけ、営利のみを直接的に目標とする組織ではなく、行政と民間による協働体制を基本としている。
- ➤ 「まちづくり株式会社」は、三役は 100 万、理事は 50 万、1 株 5 万 で全て民間から出資を募り資本金 3,150 万でスタートした。
- ➤ 設立当初は畑違いの経営で的確な人員配置ができていなかったが、 従業員数を半分にする合理化や適正な人員配置、さらなる経営効率 の改善等により、借入金も1,000万程度に減少し社員にもボーナス を出せる状況まで経営が安定してきた。
- ▶ 直営であるコンビニ部門は赤字であるが、防犯上や施設管理上のこともあり現状としてはやむを得ないと認識している。
- ➤ 陳列棚を潤すことを優先し週三回集荷に町内を回り、農産物等の出 店数は302件で、海産物については魚をさばける人材を置いている。
- ➤ 「まちづくり株式会社」として約3,000万の初期投資をしてPOSシステムを導入し、店舗運営を可視化して経営改善に当たっており、利用者のレジ通過率は55%で、一人当たりの利用単価は1,040円~1,050円であった。

(質問) 県内17番目の道の駅となることへの戸惑いなどはなかったか

(回答) ゴールを見据えていたので戸惑いはなかった。

(質問) 産直市の総参加者及び参加募集方法について

(回答) 最初は115人~113人、現在は312人。呼びかけはチラシのみ。

(質問) 地域産物の品質確保方法、季節対応方法について

(回答) 大規模農家はなく、東部の卸売業者3者に声をかけ、地元産品を優先し問屋を通さない。1週間に3回集荷を行う。農家に対し、記録を付け計画を立てるなどの指導を行うふさわしい人を採用し、旬のものを扱うようにする。

(質問) 場内の物販等の配置方法はどのように検討されたか

(回答) ディスプレイの専門家に来てもらい指導を受けた。

(質問) 運営や収支の内容などについて

(回答) 開業3年で大きな借金をしたが、あと1千万円ほどになり今年か来 年には完済しスタッフにも還元したい。そこを潤した後に、経済振 興に入る。しんどい中でも3町のリーディングカンパニーという位 置付けだけは変えないでいる。

(質問) 開業後、コロナ禍等による苦しい経営状況もあったと思うが、その中での経営努力の柱や対策で留意された点について

(回答)素人なので、皆で意見を交わしながら模索し、経営効率の話を中心 とし、営業の時間短縮などを行った。

(質問) 海産物を扱う際の、他店とのすみ分けや整理はあるのか

(回答) 市役所に依頼して水産加工施設の設置を行い、1人は魚をさばける 人物を置き、手の届くサービスをしている。

(質問) 加工食品において HACCP 施行に伴う影響などについて

(回答) 小規模事業者や地場産品にとって HACCP は切実な問題。保健所の講習を受けてもらうなど懇切丁寧に運営会社で手をかけている。

(質問) イベントの開催状況や集客の手法について

(回答) 出荷者協議会(役員会)を開催しSNS、チラシ、ホームページなどで発信している。

(質問) イベント等での協力団体等、住民連携の状況について

(回答)協力者には謝金を支払うかボランティアでお願いしている。 3町の支所長に出てもらう会議を月1回行っている。

(質問) コンビニエンスストアが出店した経緯について

(回答) 防犯上のことで出店を依頼した。セブンイレブンもローソンも面積上の問題で断られたが、ファミリーマートが出店してくれた。しかし赤字のトップはコンビニ。(5年間の累積赤字 2,000万円)警察の巡回も依頼。コンビニからの通報などもある。

(質問) 足湯や和紙体験などのアイデアはどこから、どの段階で出てきたものか

(回答) 浜村温泉の湯量は豊富なので、建設当初から要望したが、源泉かけ 流しではなかったことが残念である。

(質問) 鮮魚や農産物出店者数について

(回答) 312 人

■委員の所感

≪川上≫

- ・ 視察は浜田の「道の駅」運用の参考となることを期待し、事前の質問への回答・質問等を通じ、「道の駅西いなば気楽里」設置の経緯や運営 状況を伺った。
- ・ この施設は、鳥取市西地域(青谷、気高、鹿野)の課題解決を目指して 行政、金融機関、地域のまちづくり組織等が連携して計画され、令和元 年5月に開所されている。
- ・ 平成 16 年に鳥取市と合併した後、鳥取西地域が必要としていた地域活性化に向けた活動から、平成 26 年には「鳥取市西いなば地域振興協議会」を設立され、その後、平成 29 年にはこの道の駅を運営する「鳥取西いなばまちづくり会社」を立ち上げるなど地域と民間、行政を巻き込んだ活動が今に至る要因のようである。
- ・ 道の駅開所後、コロナ禍による営業不振で多大な負債を抱えたが、組織、銀行、行政の働きにより、現在は負債の返済はなされ黒字経営となっているようだ。
- ・ 説明を聞き、この短期間に営業成績を回復することができた要因は、 組織力によるところが大きく、加えてこの組織を引っ張ってきた「まち づくり株式会社の代表者」によるところが大きいのではないかと思われ た。「人、物、金」がそろえば何でもできると思われがちだが、この「人」 (建築会社代表取締役、因幡街道交流会議会長、鳥取市西商工会会長、 等)により大きく変革されたことが感じられるとともに、ご本人もおっ しゃられた「馬鹿になる」ことは重要な要素であることが再認識させら れた。しかし次期指定管理機関においては新たな方に引継ぎとのお話で あり、今後どのように運営されるかが楽しみである。
- ・ 浜田市が目指す公設民営による道の駅運営において重要視するべきは、 前記で明らかなとおり組織、資産も必要であるが、この組織をけん引されるトップを見定めることがカギであろうと思われる。

≪田畑≫

・ 鳥取県内では、17番目の道の駅である。合併前の3町協働・連携によるまちづくりを進めている。また、民間・住民の100%出資による、部門別独立採算による自立経営をされていた。所得向上、6次産業化の拠点、情報発信の拠点として実施されていた。これらが笑顔あふれる元気なまちを目指すために、道の駅の運営はまちづくりや観光の拠点とされていて大変に参考となった。

≪村木≫

- ・ この度の視察で、改めて「何のために」、すなわちグランドデザインの 必要性を痛感した。
- ・ この度の視察では3つの柱が示された。「(1)道の駅の実現 (2)まちづくり会社設立 (3)地域資源利活用
- ・ そしてゴールもはっきりしている。→「旧3町の活性化」
- ・ 私は「まちづくり株式会社」と初めて出会った。まちづくり会社は、 まちなか再生のための事業を推進するまちづくりのけん引役として行 政や民間企業だけでは実施が難しい事業にも取り組む、公共性と企業 性を併せ持つ会社である。
- まちづくり会社は、営利のみを直接に目的とする組織ではなく、行政 と民間による協働体制を基本としている。
- ・ 早速、ネットで調べてみると、国土交通省が「まちづくり会社の設立・ 活動の手引き Q&A」が示している。
- 「まちづくり会社」は、手法かもしれない。ただ、「まちづくり」となれば、地域と行政の関わりは必須である。
- ・ 商業の活性化、起業支援・産業おこし、教育・福祉・子育て支援、街なか居住、景観形成・街並保存そして観光振興(交流人口増加)、これは鳥取西いなばの旧 3 町の活性化につながるための次世代の継承のための交流促進かもしれないが、このことは浜田市にも言えるのではないか。
- ・「道の駅」をまちづくり・観光の拠点に位置付けて、「地域密着を重視」 し、魅力的な売り場演出することは、地域の所得向上につながり、6 次産業化の拠点にもなる。併せて情報発信の拠点となることから、交 流人口が増し、ビジョンを達成することとなる。
- ・ この度の視察で、私は「まちづくり株式会社」と出会い、道の駅を拠点に、1市4町協働・連携による一体となったまちづくりの可能性を学んだ。
- ・ 「まちづくり」とは、どうしても地縁による自治組織の活性化を想う が公民連携はここにもある。

≪大谷≫

- ・「まちづくり株式会社」の社長より説明を受けたが、説明のあらゆる 場面で鳥取市西地域となる気高町・青谷町・鹿野町の「旧 3 町のまと まり」という言葉を聞いた。編入合併という新たな局面に対し、3 町の 協働・連携により一体化への拠点施設として道の駅の実現を目指すと 共に運営組織となる「まちづくり株式会社」の立ち上げにも商工会に 属する各会社の経営者を中心とする住民主導で創られている。3 町のま とまりを通して経済振興だけでなく、その先にある移住定住その他 諸々のまちづくり課題の解決をゴールとする意識の高さが社名に表れ ていると感じた。
- 道の駅に立ち寄る楽しみは、その地での新鮮でお得感のある産品に出

会うことにある。この消費者心理に合わせ「ここでしか買えない物を出す」を徹底しているとのことであった。週一程度の頻度で店頭をチェックして生産地や製造地を趣旨に反する物があるときは撤去するなどこだわりを持っているとのことで、オリジナリティーの追求は消費者からの信頼につながる学ぶべき点と感じた。

- ・ 開業時における初期投資として約 3,000 万を掛け POS システムを導入 し店舗の運営管理に当たり経営改善に役立てているとのことであった。 浜田市における導入状況も確認してみたいと感じた。
- ・ 観光案内所の機能を有してよいことから広域観光ルートが 10 ルート設 定しチラシの展示配布も実施され、再来需要を喚起しており意識の高 さを感じた。
- ・ 3 町共通のポイントカードに従来のカードを統一し町内需要にも配慮がある。経営を安定化するためにも地元需要を一定数確保する対策も 重要と感じた。
- ゆうひパーク浜田も公設で運営していくのであれば地域産業との連携 強化が商品構成によって実感できると共に「浜田でしか買えないので 浜田に行く」と思わせる商品開発に努め、他の道の駅との差別化を考 えていきべきと感じた。

≪小川≫

- ・ 合併した 3 町商工会の温度差をいかにまとめていくかという課題解決 のためにまちづくり(株)を立ち上げ、3 町協働・連携による一体とな った街づくりを進め、地域経済の振興を目指す努力を垣間見ることが できた。
- ・ 運営方針では地域に還元・町全体の収益を高めていくことを明確に掲 ば、収支計画では収益の一部を地域振興事業へ還元している。
- ・ 「素人」と謙遜されてはいたが、ディスプレイでのコンサルの指導や プライス面では大手スーパーの店長の力を借りるなどによってしっか り対応されていた。加工産品の HACCP 対応には教育を受けた者が丁寧 な指導など努力されているが、ノウハウの集積や平準化は道の駅に共 通する課題でもある。
- ・ 大規模農家がないなかで 115~130 人の出荷者、310 人の会員登録があり、水産では魚屋に 1 人はさばく人を置くといったきめ細やかな配慮も地元に密着した施設として根付く要素ではないかと感じた。
- ・ 浜田の 2 つの道の駅の将来を検討するうえでも目指す方向と施設の位置づけの明確化することが重要と思われた。

≪佐々木≫

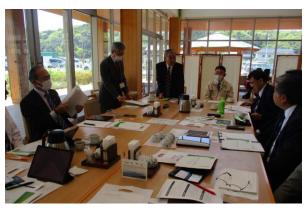
- 運営会社の社長から5年前のオープンから今日までの様々なご苦労を 忌憚なく聞かせていただいた。
- ・ 当初は素人経営で多くの借り入れもあったようだが、近々返済のめども立ち、ここまでのご苦労は大変だったと思うが、常に一つひとつ問

題を解決しながら進んでこられた感じを受けた。

- ・ 産直の出店登録が 312 店あることや、出店に際する指導、水産加工施設を作り、魚屋さんに入ってもらっていること、出荷者協議会を定期的に行っておられることなど、参考になるお話を複数伺えた。
- 施設のなかで唯一赤字となっている「コンビニ」は防犯の役目も担っているとのことだが、この地域の問題もあるとのことで、今後検討とされていた。

≪牛尾≫

- ・ トップが経済人であり、経営感覚が鋭い。
- こだわり派である。地元産物にこだわる。お土産物を見ても、全国どこでもあるような物は扱わない。
- ・ 従業員が明るい。基本的なコンセプトを守っている
- コロナ禍あけで利益が出ていて、純利益の50%を要求されているようである。
- ・ ゆうひパーク浜田は立地がよく、利益が見込まれる施設である。利益 をあげて市に対して協力金が見込まれると推察される。













② かながわ SAKAGURA

~酒蔵跡活用に至った経緯や現在の利用状況について~

- ■日時 令和6年4月26日(金)13:30~15:00
- ■場所 かながわ SAKAGURA 岡山県北区御津金川 690 番地 1 TEL 086-724-0010

■視察の目的(選定理由)

三桜酒造跡地の活用おいて酒蔵機能保存の可能性等について研究のために、 江戸時代に創業した旧家武藤酒造の木造建築の二階建て酒蔵の保存を図り、 巨松の梁、良質の杉柱、塗壁、樽材を利用し建物を復元・改修し多目的施設 として整備された「かながわ SAKAGURA」を選定し調査を行った。

■視察先の概要

➤施設の名称 かながわ SAKAGURA

▶施設種別 産業振興施設 (産業情報提供施設)

▶開設年月 平成6年3月

➤施設規模 敷地面積 767.06 m²

構造/延床面積 木造/433.4 m²

建 設 費 旧御津町で取得

施設内容 2F展示ホール:83.65 m²

2F 和室: 28.51 ㎡

1F ギャラリー: 60.84 m²

1F レストラン: 101.85 m² (目的外使用)

1F 売店: 8.61 ㎡ (目的外使用)

▶開館時間 9:00-17:00

▶休 館 日 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合、翌平日)、年末年始

➤ 売店営業時間 10:30-16:00 レストラン営業時間 11:00-17:00

▶アクセス IR 津山線金川駅徒歩約7分、駐車場:乗用車33台

岡山空港から車で約20分、山陽自動車道岡山ICから15分

■視察の内容(視察先の取組、事業内容等)

(質問)土地建物の寄贈に当たり武藤酒造側から利活用の条件や要望は示されたか

(回答) 土地・建物寄贈者の武藤氏の希望を尊重し、コンサートや小規模な 展覧会などと、食事をしながら会議ができる施設としている。

(質問) 酒蔵を活用し観光や憩いの場に整備するに至った経緯などについて

(回答) 武藤邸は昭和30年代まで「中国錦」というブランド名で日本酒の醸造・販売を営んでいた。その後無人となり、建物の維持修繕の困難

さや、国道 53 号線と県道御津・高梁線の交差点改良工事により今後の保存が問題になっていたところ、所有者から旧町へ寄贈の申し入れがあったことから、酒蔵を移築再生し、町内の埋もれた歴史的建物を有効に活用し、だれでも気軽に利用できる施設にして町内の活性化に役立たせようと改修を行った。なお、利用者の満足度を高めるため、テナント(飲食部分)を設置した。

(質問)整備方針決定に至った要因、推進主体及び住民の合意形成のポイン トについて

(回答) 上記の方針に加え、余暇時間の増大や生活水準の向上等から、町の 観光スポット的な施設や各種地域活動を展開する場が必要となって いたこと、また地域に団体客を受け入れられるような飲食施設が当 時なかったことなど、地域的・時代的な背景があったと聞いている。

(質問) 地域計画との整合性について(都市計画、公共施設整備計画など)

(回答) 旧御津町時代に建てられたものであり、都市計画がなかったと聞いている。

(質問) 地域における酒造業の歴史の検証はどの部所がどのようになされた のか(専門家やコンサルタント会社への委託等はあったのか)

(回答) 酒造場を用いた観光交流拠点として整備していることから、酒造業の歴史の検証は実施していない。

(質問) 基本計画作成者の選考方法について

(回答)基本計画は策定していなかったが、土地。建物の寄贈者が設計し、 寄贈者の意思を盛り込んだと聞いている。

(質問) 今後の運営方式や現在の収支について

(回答) 現在は指定管理方式を採用し、民間事業者(有限会社美津葉)が施設 運営を実施している。指定管理料 5,040 千円

管理運営に係る収支【岡山市】

(単位:千円)

	令和2年度	令和3年度	令和 4 年度	平均
収支差額	-4 , 772	-6 , 210	-7 , 340	-6 , 107

管理運営に係る収支【指定管理者】

(単位:千円)

[決算]	令和2年度	令和3年度	令和 4 年度	平均
収支差額	-60	145	-644	297

(質問) 議会側が関わったのはどの段階からか

(回答)施設の運営方法や運営方針については行政と議会で議論を重ねていたと聞いている。

(質問) 初期投資額及びランニングコストについて

(回答) 当時の資料によると、改修工事費は約1億5千万円。土地建物は、 武藤倫男氏から旧御津町へ寄贈された。修繕見込み等(ライフサイク ルコスト)は屋根及び外壁の補修、カーペット張替、1階ギャラリー の監視カメラ設置、トイレの洋式化、照明のLED化 R4年度:設計261万円、R5年度(予算):工事費8,560万円

(質問) 利用状況について

(回答) 利用者数の経過は以下のとおり。

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和 4 年度
施設利用者数	3, 127 人	1,636 人	2,018 人	3,569 人

なお、指定管理者が目的外自主事業で運営しているレストランは、 月1,500人ペースで来客数がある。

(質問) 施設の活用として、メインは観光か、市民の利用か、又は酒蔵の保存となるのか

(回答)条例の設置目的に「来訪者に対し御津の歴史、観光情報等を提供するとともに、歴史的施設を観光交流拠点とし、地域活性化を図る」と制定しており、観光交流拠点として機能させ、地域活性化を図ることを目的としている。

■設置目標と取組状況

来訪者に対し、御津の歴史、観光情報等を提供するとともに歴史的施設を 観光交流拠点として活用し、地域活性化を図る。

貸し館利用はコロナ前の令和元年度を上回る程度に回復。飲食施設としての利用もコロナ前と同水準程度まで持ち直している。

観光と歴史の融合を市も推し、埋もれた観光資源の掘り起こしを行っている。かつては陣屋町、金川城があり栄えた場所で、山城が沢山ある地域でもあることから歴史パネルを作成し展示し紹介している。「お城ブーム」の中、平成30年から令和4年、岡山城の集中改修の波及効果や墳丘上まで上がることができる全国最大の前方後円墳である造山(つくりやま)古墳ビジターセンターもあり観光振興に力を入れている。

■委員の所感

≪川上≫

・ 視察は三桜酒造跡地に存在する酒蔵活用の参考として、事前の質問へ

の回答・質疑等を通じ「かながわ SAKAGURA」の成り立ちや現状を伺った。

- ・ この施設は約30年前、所有者から寄贈の申し入れがあったことから旧町が移築再生し、町内の活性化に役立たせようと改修し現在がある。内部は、酒蔵の骨格を活かした食事提供や会議や展示に活用できる空間仕様となっているが、目新しい耐震仕様は見受けられず、私だけかもしれないが、「新耐震」に適合していると説明されても、柱のゆがみや「ほぞ」の状況から、揺れによる抜けや座屈の心配が感じられた。しかし、大きな梁や柱・土壁が落ち着きを生み出していることは確かだ。
- ・ 移築には約1億5千万円の多大な費用がかかったが、地域の観光・食事・集会のできる施設として機能し、令和5年度に約30年ぶりの大規模改修を8,500万円程度かけて行っている。
- ・ 説明を聞き、浜田市においては酒蔵をどのように活用するかの議論もなされず、骨格の一部の保存・活用でお茶をにごすのではないかと思慮され残念な感は否めない。
- 浜田市は、解体し更地にすることを優先するのではなく、地域の歴史 の一部である酒蔵をどのように残し活用するかをまず検討すべきであ ると思われる。

≪田畑≫

- ・ 岡山市と合併以前旧御津町の酒蔵の無償譲渡を受け 1.5 億円をかけて 建物改修し、合併後に岡山市に引き継いだ。市は、条例を策定し、観 光交流の拠点とし、地域活性化を図ることを目的としている。管理運 営は、旧御津町の飲食店に指定管理を委託している。
- ・管理料、年間約500万円である。令和4年度の利用者は、3,569人であり利用者が大変に多かった。市においても、民間からの無償譲渡物件があれば、よく検討して地域の活性化・情報の発信地と工夫すべきと考える。大変参考になった。

≪村木≫

- 本年1月に淡路島に酒蔵リノベーションを先輩、同僚議員と視察した際に、当該施設に寄ったところ改修中であり、残念ながら見ることができなかった。
- この工事の施工主が岡山市であることにたいへん興味を持ったところに、このような視察を計画していただき感謝している。
- ・ 先ず、この施設の開設は平成 6 年であったことに驚いた。ただ、起因 は持ち主からの寄贈とのことであった。
- ・ 合併前の施工であり、基本計画には寄贈者の意思を盛り込んだと聞い ているとの説明であった。
- ・ 今では、当時の歴史や観光情報の提供、観光交流拠点となっており、 令和 5 年度に 8,560 万円(設計令和 4 年度 261 万円)かけて改修したと

の説明であった。

- 写真のとおり、当時の材料を梁や柱に再利用し、たいへん趣のある施設であり、特にレストラン業としての空間にたいへん興味を持った。
- ・ また、今後は、昨今の「山城ブーム」にあやかって当該施設の前にある「山城」を活かしたイベントを考えておられるところは、昨年三隅 氏800年やのろしリレーを行っている私としても興味がある。
- ・ 酒蔵のリノベーションは、もちろん耐震の課題やその建物の状況にもよるが、施設にはその空間の趣や歴史あるものや希少価値あるものは大切にしたい。
- ・この度視察した酒蔵リノベーション施設は、コンパクトではあるが「市 民による多目的・多用途な利用を中心に、市の内外から多くの人が訪 れ、にぎわいのある公共用空間となる整備・活用」に近いものを感じ た。
- ・ 更に言えることは、この二日間の視察で、なぜ、施設を作るか、施設 をどう活かすのか、どんな目的・ビジョンを達成するために、どんな 行動を起し(ネットワーク)、何を作り(公共)、活かす(地域振興)かの 計画が必要であると思った。

≪大谷≫

- ・ 国道 53 号線と県道との交差点の改良工事に伴って天保 4 年 (1833 年) に創業したとされる酒蔵を歴史的建造物として評価して移築復元した施設と想像していたが、解体し利用できる部材を活用して歴史的建造物風に建築したもので移築復元ではなかった。岡山市担当者も編入合併前の旧御津町時代の事業であるため活用できた部材の割合など詳細は不明とのことであった。実態を見たところ梁材には 50 cmを超える太い松材が活用されていた。現在ではなかなか手に入らないもので貴重な材と感じたが一部虫食いも見受けられたので、梁や傷んでない柱など部分的と感じた。さらに、松材でなく欅材または栗材であればさらに価値は高まったと感じた。
- ・ 建物外観はリニューアルしたためか、酒蔵と感じる雰囲気や規模感は 感じられなかったが、天井部分に見える梁材は伝統的建造物としての 趣を醸していた。
- ・ 岡山市は、この施設を御津の歴史・観光情報等を提供するとともに歴史的施設を観光交流拠点として活用する「産業情報提供施設」と位置付けている。地域に団体客を受け入れる飲食施設が当時なかったことから目的外使用として1階部分の64%の約110㎡をレストランと売店スペースにあて月1,500人ペースで利用が有り、飲食ができることから一定の成果を上げていると感じた。
- ・ 1階の残りのスペースは、歴史・観光情報のギャラリーとなっており 「台頭する宇喜多氏 ~松田氏との関係の変化~」、「松田氏の滅亡 ~伊賀久隆の決断~」、「御津には山城がいっぱい!」などパネルがあ

り興味が湧いた。岡山市としても山城紹介に力を入れ観光と歴史との融合を図りたいとのことであった。浜田にも多くの山城が存在しているので世の流れに後れることなく、調査・整備・啓発 PR に力を注ぐべきと感じた。

≪川川≫

- ・ 三桜酒造跡地取得の経緯を聞き、建物の現地調査も実施してきたが、 かながわ SAKAGURA との条件の違いを実感した。
- ・ 土地・建物所有者から寄贈の申し入れと、旧御津町の「活性化のための観光交流拠点」の整備という双方の思惑がうまくマッチし、設計も寄贈者の希望を尊重し、コンサートや小規模な展覧会などと食事をしながら会議ができる施設となったという事情があるが、そうした意向は聞いていない。
- ・ また、江戸時代後期に建てられ現在でも十分な強度を保つ木軸の酒造 建築で巨松の梁、良質の杉柱、樽材等が利用され「梁と柱の重厚な存 在感」をもった「芸術空間」を作り出しているが、そうした部材は残 っていない。
- ・ 三桜酒造跡地利用について酒蔵の保存を図りながら伝統を伝える復元・改修という形ではなく、土地のみの有効活用の方向で検討するのが妥当と思われる。

≪佐々木≫

- ・ 30 年前に地元の酒蔵からの寄贈により、地域の活性化を期し、旧町が建てた施設で、地元のレストランが管理者で運営されている。
- ・ 酒蔵の歴史的建物を有効に活用されており、管理料 500 万で年間 3,000 人の入込、レストランは月 1,500 人で「ここまで日の目を浴びるとは 思わなかった」との担当者の発言もあった。
- ・ 昨年度改修され、近隣の「城跡」などとともに、さらに観光拠点として発展するような気配を感じるものだった。

≪牛尾≫

- ・ 旧町の中核的施設として機能しており、地元業者の飲食店が入り好評 である。
- ・ 周辺には同業他社がなく、地元利用が計算できる。
- ・ 三桜跡地は文教ゾーンであり、近年、飲食店やカフェが激減している。 計画の策定がうまくいけば、市民が交流したり滞留出来る空間づくり ができ、まちおこしにつながると感じた。

















【考察】

「道の駅 西いなば気楽里」

施設設立の初期から地域密着・公民連携を活かした運営がなされ、加えて、コロナ禍での困難な運営(赤字・借金経営・人員カット)を乗り越えてこられた現状説明に、「道の駅」を地域のまちづくり・観光の拠点として据え、地域総力で支えてこられたことが伺えた。

この「道の駅」の運営で特記すべきは、運営を「まちづくり株式会社」が行っていることが挙げられ、社名には、地域一丸となって運営しようとする姿勢が現され、実際もその通りであると説明から受け止めた。また、道の駅に立ち寄る楽しみである新鮮な産品や「ここでしか買えない物」を徹底して前面に出し、オリジナルな物も生み出しているところも挙げられる。加えて、運営方針に「地域に還元・町全体の収益を高める」を掲げられ、実際に収益の一部を地域振興に還元されている。そして、この組織をとりまとめ、目標に向かって引っ張ってこられた方々の功績は大きい。

今回の視察から、「ゆうひパーク浜田」の運営に求めるものとして挙げられる事柄は、「まちづくりや観光の拠点」「地域産業との連携」「他所の道の駅との差別化」「民間活力による経営」「利益を生み出し地域に還元」などであるが、最も重要であるのは「どのような組織が運営するのか、運営組織の力量をどのように判断するか」であろうと思われる。今後のプロポーザルに向けては、以上の観点から臨んでいただきたい。

「かながわ SAKAGURA」

平成初期、当該施設が道路改良の支障となったことで、旧所有者から旧町が寄贈を受け、地域活性化を目的として酒蔵の建材を活用した集会施設、食事のできる場、観光施設として移築改善されたうえで、地元レストランが管理者として運営されていた。

昨年から本年にかけ、市費約 8,500 万円を投じて内外装の大規模なリニューアルがなされ現在に至っている。

リニューアルにより、外観は酒蔵当時の様子が薄れたように感じるが、屋内の構造、特に天井部分に見受けられる屋根組(梁材)は伝統的構築物の趣を醸し出し、観光施設としての存在感はあった。そしてレストランは、酒蔵の趣の中での食事の場として懐古的ニーズに見合った施設として多くの顧客を生み出し、収益の大半を占める重要な部分となっている。また、周辺の山城を活かしたマップ作製や案内は、新たな観光の目玉になるような予感がした。

今回の視察より「三桜酒造跡地や酒蔵の活用・検討」に求めるものとして、「ここに酒蔵が存在しており地域経済の一役をなしていたという歴史」「酒蔵という構築物が持つ空間や趣を活かす」「地域のニーズを活かす」などであるうと思われ、今後の検討において生かされることを期待する。